

審査員特別賞

日本に住む私の使命

京都市立二条中学校 3年

新谷 心苗

「無償の支援は麻薬。」私は衝撃を受けた。自分が知っている世界の狭さに愕然とした。そして初めて、真の国際貢献について深く考えさせられた。

これまで私は、何度か世界一周をしてきた人に話を聴く機会があった。バックパック 1 つでの旅の話は、全てが新鮮で刺激的だった。そして、その人たちの話を聴くと、自分の生き方次第でもできるというワクワクする気持ちになった。そんなある日、高校生バックパッカーの吉野裕斗さんの話を聴いた。彼の話は、今までパワーをもらうばかりだった世界の話とは一味違った。真の国際貢献に必要な物を自分で見つけるために世界一周してきた彼からは、想像を絶する世界の現状が伝えられた。都市部のホームレスにもなれず墓場で暮らす人々、子供を助けるはずの孤児院を嫌がる浮浪児、空腹しのぎに我が子にシンナーを買い与える親…。私は自分の恵まれた環境に感謝すると同時に、教育の大切さ、知識や情報が無い事の恐ろしさを痛切に感じた。また、吉野さんは仲良くなった裸足のストリートチルドレンにサンダルをプレゼントした。彼らは喜び、1週間後も履いてくれていたそうだ。「よかった」私は心からそう思った。しかし、再び吉野さんを見た彼らは「僕の服はボロボロだよ」「こいつも裸足なんだ」と次々に催促をしてきた。「僕は彼らに人にたかるという事を教えてしまった」吉野さんは後悔していた。ショックだった。一度手にするともっともっと欲しくなる。これこそが「無償の支援は麻薬」という事だ。同じ頃姉がニジェールの貧困や就学率について調べていた。現地の人々に貧困の意識があるかないかは分からないが、やはり教育は鍵となりそうだ。

吉野さんと姉の話から自分なりに真の国際貢献について考えてみた。寄付を募り物を送る、建物を建てる、井戸を掘ったり発電所を作ったりする。今日を生きる事が精一杯の人に今日必要な物を贈る。これは速効性がある。しかし、このような支援だけでは吉野さんと同じ事になるのではないか。それは個人対個人、団体対団体、ひいては国対国でも起こりうる。

では、どのような支援が有効か。今の私が考えた結論はこうだ。現地で雇用を生み出す技術と仕組みを提供する、これは長期的に彼らを支援していく事に繋がるはずだ。そこには教育を受けるための家事の代行、学校のような知識や情報を伝える仕組みも含まれる。しかし、今の私が起業する事は現実的ではない。だから私は今、恵まれた環境を生かして現実を見つめ、自分の目指す国際貢献の方法を見つけるため、知識を増やしている。将来、自ら幸せになる力をつけてもらうような形で彼らを応援したい。世界中の子供が、大人が、自分の力で何かができる、とワクワクできる世の中を作っていく事こそが恵まれた環境に生まれた私たちの使命なのだ。